

幼児に漢字教育をすることをためらう原因の一つは、漢字は書けなければいけないという先入観です。しかし、漢字は書けなくてもいいのです。

日常生活の中で、「書く」ということは不可欠の要素ではありません。字が書けなくても不都合なことは、ほとんどないのです。書くというのは、仕事として漢字をたくさん知っていなければ困る職業の人がやればよいことで、そういう人は自然に生活の中から身につけていきます。また、書くということは自分の思いを表現することですから、少なくとも小学校の中・高学年になってからやればよいのです。

幼児期には読めさえすればいいのです。書ける必要はまったくありません。そもそも漢字を全部書けるようにするために、一生懸命に漢字の書き取りをさせるというのは、実にバカげたことです。かりに漢字がすべて書けるようになったとしても、幼児や子どもにとって何のプラスになるかを考えればわかることです。幼児がものを書くことはまったくないし、子どもが手紙を書くこともほとんどないのです。

一方、文字を「読む」という行為は、四六時中つきまっています。朝起きてから夜寝るまで、私たちは文字を見て、そこでいろいろと判断し

なければなりません。文字を通していろいろな情報や知識を獲得しなければなりません。

漢字が読めなくても、辞書を引けばいいじゃないか という反論が出そうです。しかし、この忙しい時代、読めない漢字を辞書で調べるということはなかなかできません。現に、朝の忙しいときに、読めない漢字が出て来たからといって、辞書を引いたような経験があるかといったら、ほとんどの人はないのです。漢字というのは読めて、意味がわかることが大切なのです。

漢字は読むものだという観点にたって、たとえば「鳩」という言葉で考えてみましょう。

これは「は」という音と「と」という音の二つが組み合わさってできています。しかし「は」を聞いた時には「と」はまだ出てきませんし、「と」という音を聞いたときには「は」はもうないのです。

時間的に食い違っているわけですから、それを「はと」としてまとめることは、幼児の脳の仕事としては大変な作業なのです。こういう音声の結びつきを頭に記録するのは、子どもにとって非常にむずかしいことなのです。